

---

Delete

rouge

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Delete

【コード】

N1665E

【作者名】

rouge

【あらすじ】

届いた手紙。その手紙からすべてが始まった。

## プロローグ

ある日、届いた黒い一通の手紙。

何の躊躇もなく、宛先のないその手紙を開いた。

俺はこの手紙で、後々後悔することになる。

手紙にはこう、綴られていた。

高木 彩斗様へ

あなたは1000人に選ばれた1人です

世界の命運をかけて戦ってください

来る、来ないは自由です

明日、緑市中央公園にPM5時に来てください

来なかった場合、欠場とみなします

欠場する、しないは自由ですが、世界の命運がかかっていることを

お忘れなく

は？

第一感想がこれだ。

極普通の人なら当たり前の反応である。

いかにも怪しげな、そして非現実的なことをいきなり突きつけられても、悪いイタズラだと思いうことができない。

世界のために戦え？

こんなアニメや漫画の世界みたいなことを書く年頃といたら、やっぱり小学生だろうか。

しかし小学生にしては文章が大人びすぎている。

パソコンで印刷ってことも小学生にとっては難しい。

中学生か？

いや、こんな馬鹿なことに時間を費すくらいなら友達と遊んでいるだろう。

高校生ではない。

もう一度、きっぱり言おう。

高校生ではない。

俺が高校生である限り、高校生はこんな馬鹿げたことはしないからな。

そんなことを考えながら暇つぶしに六法全書を開く。

高木彩斗は高校1年生。

飛び抜けた秀才であり、運動神経抜群、超美形、おまけに家は大富豪といった羨ましすぎる生活を送っていた。

ただ、両親を幼いときに亡くした。

これだけはどうしようもならないが、唯一自分にかけているところだった。

そんな彩斗には毎日が平凡すぎてつまらなかった。

だから、と言っても理由になるかどうかは分からない。

それでも何故か、妙に手紙のことが気になった。

人間は誰でも、こうしたい、こうなりたい、といった希望があり、

それが不可能なことであると分かっているとしても、もし目の前にその願いが叶えられるチャンスがあれば、後先考えずに動く。

だから詐欺とかそういうことが成り立ってしまう。

今、彩斗は人間がそういう行動をとると頭で分かっているとしても、本能は行きたいと告げている。

開いた六法全書はまったく視界に入っていないようだ。

手紙が気になって気になってしょうがない、と言ったところであるう。

彩斗には毎日が平凡すぎた。

つまらなく、暇すぎた。

結果、明日彼の住んでいる緑市の中央公園に行くことに決めた。

『後々後悔することとなる』  
それは間違いだ。  
届いた瞬間から後悔するべきだったのだ。

## 最後の平凡

彩斗の普通の日常を過ごす最後の日。

今日は平日だったため、学校へと向かった。

その途中に見える中央公園。

5時になったら何かつまらない毎日を変えることが待っているのか？

やはり、学校はあっけなく終わった。

特に何かあったか、と聞かれても何も答えることは出来ない。

学校へ着いて、授業を受け、学食食って、昼休みは寝て、授業を受けて、部活も入部して無いため帰路につく。

ただいまの時刻4時。

あまりにも『誰か』との集合時間は早すぎる時間だが、ゆっくり歩けば公園まで30分くらいかかる。

遅すぎていけないことはあるが、早すぎていけないことはない。

歩いていると、書店が目にとまった。

いつもなら早く家に帰りたいので通り過ぎるが、今日は時間もあるし寄ることにした。

それに、ここに来るのは最後になるかもしれない。

そう思った自分が非常におかしくてクスクス笑っていると、近くにいた小学生に笑われた。

恥ずかしくて書店を飛び出し、走っていくとあと少しで公園というところまで来ていた。

予定よりも大分早い。

4時20分に公園についてベンチに座った。

早すぎていけないことは無いかもしれないが、早すぎて暇なのは自分にとっていいことではない。

公園をぐるっと見渡した。

小学生は滑り台で遊び、中学生のカップルは噴水の前でこそ話

している。

見ているこっちがむず痒くなりそうなほどうまく話せていない。誰でも一度はあった年頃。

あの頃、俺も同じような感じだった。

まず彼女がいるってこと自体、恥ずかしくて誰にもばれたくなかったなあ。

でも女の子はそういうこと言いたがるから、付き合って2、3日するとすぐにばれてた。

そんなことを思っていると自然と笑みがこぼれる。

今、普通のことを考えてるだけなのにすごく楽しい……

なぜだかまったく分からないが。

空を見上げ、ボーっとする。

時間だけが流れていく。

(こんな時間は、大ッ嫌いだ)

彩斗の一番嫌いなもの、それは退屈だった。

それを乗り越えてまでしてここにいるという事は、相当平凡から抜け出したかったんだろう。

時計の針が11を指していた。

あと5分で平凡から抜け出せるかもしれない。

(まったく……手紙出してきたのそっちなんだからもっと早くこいよ)

正直、イライラさえしてきていた。

が、それを押さえつけるようとする本能。

(5時になったら絶対帰ってやる)

心に硬く誓い、イライラを沈める。

空を見ていたら普通、腹立ちなどまったくくしなはずなのに。

携帯を取り出し、メールを確認すると友人からきていた。

Re:

何の話かまったくわかんないんだけど……

熱でもあるか？

これは、俺にもしものことがあつたら線香の1本でも立ててくれ、  
といったことに対しての返事だ。

これから会うのは誘拐犯の可能性だってある。

画面右上にある時計が自然と目に入った。

携帯に表示されている時刻は、4時59分だった。

俺の腕時計は電波だから、1秒の狂いも無い。

見ると、残り10秒だった。

あと10秒で……

9……8……7……6……

明日が楽しくなるかもしれぬ。

5……4……

こんなに1秒1秒が長く感じられるのは初めてだ。

3……2……1

カチ

5時ジャスト

突然、静かになった。

何かがおかしい。

車の音がしない。

さっきまでいた滑り台の近くの少年がいない。

さっきまでいた中学生のカップルがいない。

人が、いなくなった気分だ。

「こんにちわ」

後ろからかけられた声に、ホッと安心して振りかえった途端、ギョ  
ッとした。

真っ白のハットをかぶり、真っ白のコートを纏い、薄笑いを浮かべ  
ている若い男性。

確かに服装は変ではある。

しかしギョツとすることは無いのでは、と疑問に思った。

なんでそんな感情が表れたのか、不思議だった。



「ここに来た、ということとは世界の命運をかけて戦ってください、と解釈してよろしいですね？」

首を傾げ、にっこりと笑いかけてくるのだが、どこか不気味さを漂わせている。

「世界の命運って何ですか？」

取り合えず首を縦に振る前に、聞くことを聞いた。

あからさまに他人行儀な口調で。

「神と戦っていたたたくのです」

何を言われたか頭がついていけなかった。

言葉がでない。

「ああ………すみません。直接戦うわけではないので安心してください」

俺の心を読んだかのように答えた謎の男。

「これ、なんですか？」

辺り一帯を見渡して問う。

どう考えたっておかしい世界。

「ただ世界を切り離しただけです。先ほどの答えを聞いてませんが、戦ってくださいますか？」

ただ世界を切り離しただけ……

わけが分からないが、仕方無しに首を縦に振る。

ここに来た理由はあの手紙のためなんだから、ここまできて引き下がるのは名が廃る。

「ご了承致しました。ありがとうございます」

そういうと、ふわっと体が浮いた。

体が持ち上げられるというよりは、地上が足から離れていく、そんな気がした。

あの手紙は子供の悪ふざけと思っていたんだが、そんなことではないようだ。

むしろ、そんなことのほうが良かったとまでに思っている。

楽しいことが待っている

そう望んで来たはずなのに、『神と戦え』とは……

「どこへ行くのですか？」

その質問には笑顔で返され、それ以上聞くことはなかった。

## 神

体が急に浮いたのに、不思議と怖くない。

それどころか、ワクワクしている自分が腹立たしい。

高く飛ぶにつれて、徐々に小さくなっていく緑市。

自分が生まれ、育ってきたところ。

心残りが無い、と言ったら嘘になるのは当然のこと。

「さて、見るのは最後になるかもしれない自分の故郷を、しっかりと心に刻み付けられましたか？」

まだ、実感が沸かない。

浮いているのも、人がみんななくなつたのも、事実。

そんな事実を突きつけられているにもかかわらず、こんなことはありえないと、自分の中で否定の念を唱えている。

今見ている緑市だって、世界とは切り離されたただの模型でしかないと言われた。

そんなところを見て心に刻み付けるものなど、あるとも思つたのか？この男が言っていること、すべてを受け入れることが出来ない。

「無言、と言うことは『もういい』と捉えますね。では」  
空中で止まった。

と思つたら、誰もいない（いるはずがない）ところに手を差し出し、理解不能な言葉を発し始めた。

「我が主にてこの世の創造者よ、天と地の狭間に我が歩むべき道を示し、光あるところに導きを」

こんな恥ずかしいクサイ台詞を抵抗も無しに言つてのけるとは、誰が見たって頭がおかしい人にしか見えない。

何か言つたことに意味あるのだろうか？

「あの、大丈夫ですか？」

「キミは僕がおかしくなつたとも思つたのかい？」  
頷くが、やはり不気味な笑顔を絶やさない。

相当気の長い人（？）だ。

「ほら」

彼の指差した方向には、空間を無理矢理引きちぎって出来たかのような大きな穴が開いていた。

その穴に吸い込まれるかのように体は勝手に動き出す。

怖い……

この向こうには行ってはいけない気がする。

しかし体は自由が利かない。

抵抗することも出来ないまま穴へ入った途端、入り口は消えた。

眩い光が収まり、周りを見渡す。

そこは闘技場とでも言うのだろうか？

今自分のいるところが、観客の席によって円の形に囲まれている。

すなわち、自分のいるところと言うのは猛獣達と戦うようなところだ。

出口（入口かもしれない）は閉ざされていた。

自分1人がいるわけではない。

周りには俺と同じように集まったと思われる人たちがいた。

みな年は同じくらいで、高校生くらいだと思う。

ざっと500人はいるだろう。

それほどの人数が入っても、まったく狭いと感じさせない広さを誇る闘技場。

（しかし、何なんだこの服は）

皆、黄一色、青一色、赤一色の服を着ている。

俺は青一色の服をいつの間にか着せられていた。

こんなところに、こんな格好で連れてきて何をするつもりなのか。

ふと疑問に思っつて尋ねようとしたが、いない。

さつきまで俺の前を飛んでいた白一色の男がいない……

「ハイハイ 皆さんお静かにネ」

上からの声にびっくりして、ざわめきが消え去る。

特に大きな声でもないのに、この広い空間に響き渡る。

その声の主は白い仮面と白い服装で包まれ、王座のような椅子に腰掛けていた。

「ワタクシは手紙の送り主の神デスww」

どこかふざけた口調に、ふざけた台詞。

神、そんなものは存在しない。

両親を亡くしたときに抱いた感情。

「ここに呼び出したのは言うまでもありません。ワタクシは神の仕事に疲れたのデス。だから今、ここにいる選ばれた人たちのの中から神を選出しよう！と言っわけデス」

どこからか出てきた紙芝居を手に持ち、ぱらぱらとめくりながら説明を続ける。

「神サマがいなくなつては世界が破滅してしまいマスからネ」

世界のために戦え、とはそういう意味だったのか。

ふざけている。

「評価はワタクシがします。キミ達の服は信号機なのデスww。アオからキになりアカとなる。意味、分かりマスか??」

察しのいい俺はすぐに理解した。

理解したくないことまで理解する、と言うことは嫌なことだ。

神を選出するためには、神が評価をする。

その評価がもつとも高いものが次の神となる。

しかし、神の仕事が嫌になってやめたあいつを見て、神になりたいと思うものはここに集まっている人の半分をきっているだろう。

だから赤の服をずっと着続けるかも知れない。

目の前に神がいる、ということも忘れて。

そんなことでは神が決まらない。

それでは本末転倒。

だから、神はこうするだろう。

信号機に赤の次は無い。

赤を無視して渡るといふことは、すなわち……

「アカの次は死なのですヨ」

そういつのと同時に、手袋をはめた手で中指と親指を合わせ、ピンとはじいた瞬間……

ドゴオン

後ろですごい爆発が起こった。

集まった全員が息を呑んで爆発したところを見ている。

嫌な予感がする。

「ここに集まってくださった人たちは687人デシタ。ワタクシ、奇数は嫌いなもので。アハハ」

これが……神のすることか　！？

俺の両親を殺した神の卑劣さは、想像をはるかに超えていた。

「ま、見せしめということにしておいてくだサイww。ちなみに着ている服は適当に振り分けたものですヨ。『運も実力のうち』ってやつですかネ」

俺は青の服を着ている。

これは運がいいと思っただろうか？

他に死を目の前にして悲しんでいる人たちがいるのに、喜んでいいものだろうか？

「ふざけんな！！俺はこんなことをするためにここに来たんじゃないえ！！もといいた世界に帰せよお！！」

突然の罵声。

俺のとなりになっていた男だった。

彼は赤の服を着ている。

「よ、よせ！」

無駄な死は出来るだけ見たくない。

俺はすかさず声をかけた。

「うるせえよ！青着てるてめえに俺の何がわかるんだよ！俺は死の目の前なんだよお！！」

言われた言葉に愕然とした。

赤は死を恐れる。

黄は戸惑う。

青はねたまれ、怒りをぶつけられる。

結局どの服を着たって悪魔が纏わりつく。

「言葉遣いの悪い人は神サマにはなれませんヨ」  
凄まじい音とともに、血を見せることもなく、跡形も無く、吹き飛ばされた名も知らない男。

自然と涙が頬を伝った。

どうしてだか分からない。

地面に突っ伏し、拳をつくり、大地を何度も叩く。

誰だかまったく知らない人なのに、悲しい。

怖いのか？死が……

違う、そんなものではない。

「アララ、奇数になっちゃいました……」

笑っているのに、悲しそうな声を出して俺の気持ちを踏みにじる神。絶対にアイツは許さない。

「アト1人消さないとww」

だれにしようかな、神様の言うとおり、と指で順番に人を指している。

あいつにとっては人だと思っていないかもしれないが。

「アレ？神サマの言うとおりって……ワタクシ神じゃありませんカ

！！！」

笑えないジョークを言って、1人で笑っている。

「じゃあ……何ですか、その目ワ？」

誰かを指差そうとして、俺に目が留まった。

土を握り、アイツをにらみつける。

絶対に殺されることは分かっている。

それでも、許せなかった。

「ンー。まあ、青信号渡つても死ぬときつてありマスからネ」

屁理屈を言いながら、今度は人差し指と親指で鉄砲のような形を作り、俺に向けて引き金と思われる中指を引いた。

……何も起きない。

「オオー！！忘れてました……1日に消せるの2人まででした。命拾いしましたネエ」

死んでもよかったのに。

そう思った。

「じゃあ今日の説明はココまで。また明日」

そついうと出口が開き、神は消えていた。



自分の振り分けられた部屋で、さっきの出来事を振り返っている。なぜ突然、罪も無く普通に生きてきた人たちが死ななければいけないのか。

湧き上がってくる怒りを抑えるものは恐怖だった。

さっきは怒りで周りが見えてなく、死ぬつもりでアイツをにらんだ。どうにでもなれ、という気持ちだった。

しかし自分でも憎いことに、時間が経つにつれて怒りが薄れていく。怒りは収まらないのだが、怒りよりも恐怖が強く反応する。

もうアイツに反抗するような勇氣はない。

やはり、生にしがみ付こうとするのは人間の本能であって仕方ないのである。

それでも自分が嫌だった。

コンコン

誰かが部屋を叩いている。

「誰ですか？」

「開けてください」

会話になっていない会話を交わす。

「どちら様ですか？」

「お開けください」

このままでは永遠に続くだろうと思い、仕方なく戸を開けた。

そこにいたのは、白一色の男！

「あなたどうして……」

相変わらず不気味な笑みを浮かべながら、部屋へと入りこんできた。この不気味な笑みは、神とどこか似ている。

ずかずかと、しかしゆったりとした足取りで勝手にソファアに腰掛けた。

「僕はあなたに忠告してきました。先ほどのようなことは今後一切

やめたほうが身のためです」

そんなことは分かっている。

次アイツに会うときは2度とあんなことするものか。

「あんたは誰、というかなんなんだ？」

俺もテール越しにある、向かいのソファーに腰掛ける。

「神の使いといったところでしょうか」

アイツの………使い　！？

その言葉を聞いた途端、この男を見る目が変わった。

だからコイツの不気味さは神と何か似ているのか。

不気味さが似ているというより、神そのもののような気がする。

「ともかく、さっきのようなことはやめてくださいね」

「なんで俺に肩入れするんだ？」

俺がたとえ殺されようと、関係ないのではないのか？

他に神となりゆるものはいくらだっている。

「勘違いしないでください。あなたのためではありません。世界のためです」

「

そういうと、立ち上がり、マントをひらりと回した。

途端、風が周りを囲み、男はハットを飛ばされないようにと手で押

さえる。

「あんた、名前は……？」

風は非常に強く、俺までも巻き込んで吹き飛ばしてしまいそうだった。

「

ありません」

きっぱり、一言。

いつもの笑いとは違い、少し悲しげな表情を一瞬見せて、消えた。

風もなくなり、さっきまでの部屋が戻った。

闘技場。

昨日の死が脳裏を過ぎる。

「時間厳守、いいデスね」

俺たち、685人が集まると神が現れた。

時間厳守、朝起きて部屋の扉を見ると9時集合と書かれていた。

追記で、守れなかったら死にますヨ、と書かれていたから、遅れてくるやつはいるはずもない。

「デハ今日のイベントを発表します」

イベント？

どこからか、選択を迫られるときのBGMが流れている。  
止まった。

「決まりました！ワタクシのペットと戦っていただきますww」  
ペット？

(さつきからよく意味の分からない言葉をベラベラと……)

「じゃあまずは麒麟からですネ！ドウゾ」

麒麟、それは動物園にいるやつではないことは想像がつく。

きつと伝説上の生き物、獣類の長……

「制限時間10分、逃げ切れたらそれで勝ちデスガ、死ぬかもしれ  
ないのでアシカラズ」

出口とは違う方の扉が開き、そこから出てきた怪物……

「ハーーーーー……ジメツww」

大地を割りながら、全身に雷を纏いながらこちらへ突撃してきた。

みんな呆然とし、動くことすら出来ない。

「逃げろっ　　!!!」

俺の言葉に反応したのか、みんな叫び声と同時に、一斉にバラバラに散らばる。

逃げ出そうと必死で、何人かが転倒した。

麒麟は進路の正面にあった岩にぶつかり、岩を粉砕。

転んだ人たちは運良く、麒麟の攻撃は当たらなかった。

あんな突進当たったら一撃で死ぬだろう。

しかし避け続けるのも無理に等しい。

何か策を……

周りを見渡すが、あるのは今皆が隠れている大きな岩くらい。落ちている石では到底ダメージを与えるのは不可能だ。考えていると、後ろから突然凄まじい音がした。

岩が、突進によって砕けた。

衝撃で俺と、近くで同じ岩に隠れていたやつらが吹っ飛ばす。

命に別状はないだろうが、肺が圧迫されてうまく呼吸ができない。

うずくまっているところに麒麟が来たらおしまいだ。

また、岩が砕ける音。

他の人の所にいったらしい。

何とか呼吸を整え、立ち上がる。

「ヒヒヒヒーン　！！！」

甲高い声とともに後ろ足を上げたかと思うと、足に雲のようなものが付き、空に浮かんだ。

（空中からも攻撃がくるのか　！！！！）

高く、高く上がると、物凄い勢いで急降下してきた。

幸いにも、向かっているところは誰もいないところ。

地面に着地した途端、地割れが起こった。

「……………！！！」

その地割れは皆の足元へと罅を広げる。

亀裂の入ったところに足をとられたら危険だ。

すぐさま亀裂から離れ……

「フヒーン　！！！！」

空に向かってさつきよりも大きな鳴き声を上げたかと思ったら、突如雷が落ちてきた。

その雷は麒麟に当たり、罅割れたところを通り、地割れの隙間から雷が吹き上がる。

（アイツが避雷針の代わりに……………）

こんな雨も降っていない、乾いたところで雷が落ちて、しかも乾いた地面を雷が伝うなどといった常識離れたことが起こってもよいのか。

吹き上げた雷に当たり、倒れている人が何人かいる……  
すぐさま一番近くにいた人に駆け寄った。

「つく……」  
体を揺ると、反応がある。

まだ息はあ

「ヒヒヒーン ……！！！」

麒麟の声に反応したかのように、今度は雷が空から直接降ってくる。  
落ちる前には地面が光るようだ。

とはいえ、かわすのは難しい……

俺のいた地面が光っ

ズドン

かろうじて避けたが、静電気が雷の周りに纏わりついてたため、  
体が麻痺する。

そんなことよりさっきの人は……

……目の前の光景が信じられない。

黒い、ただの残骸となっている彼は、さっき確かに俺が接触した人

「くそお、くそお……」

絶対に、今、ここに、彼はいたんだ！

それが、一瞬で、すべて消えて、何もかも無くなって……

「いたんだ……ここに、いたのに……なんで……」

なんで……

「ヒヒーン ……！！！」

相変わらず、常識はずれのスピードで、常識はずれの力で突進を続  
けている。

俺はさっきの雷を（直撃ではないが）受け、体が麻痺して動かない。  
麒麟は向きを変えた。

シマウマを狙うライオンの如く向かってくる。

一歩一歩が大地を砕き、纏う雷は付近にバリバリという音を立てな  
がら空気を乱し、突っ込む。

体は依然として動かない。

死……

いや、死んでいない。

恐怖で閉じた目を開けると、そこには黄色の服を着た大柄な男が立っていた。

しかしどこか子供っぽく、高校生くらいだと分かる。

どうやら横からタックルで麒麟を吹っ飛ばしたようだ。

「大丈夫か？」

体を起こしてもらって、なんとか立ち上がる。

「どうして俺を助けて……」

「あんたが叫んでなかったら死んでた」

一番初めのことだろう。

なんとか命拾いしたが、まだ危険が去ったわけではない。

立ち上がるうとしてしている麒麟が、怒りの矛先を彼に向ける。

「危ない、早く俺をおいて逃げろ！」

「そうしたほうがお前にとっても安全だろうし、そうする」

麒麟は眩い光で包まれていた。

空気が、痛い。

さっきとは比べ物にならないほどのスピードで走ってきた。

俺を助けてくれた男は、出来る限り俺から離れるように走っていく。

体の痺れが大分直ってきた。

彼は大岩に隠れるが、このままではきつと岩もろとも粉々にされてしまう。

「こつちに向かって、飛べえ　　！！！！！！」

俺が大声を張り上げたとき、麒麟は岩にぶつかる寸前。

彼は俺の声にすぐに反応し、こちらへ力の限り飛んだ。

あと1秒遅ければ、麒麟に激突し、命は無かっただろう。

それくらいギリギリだった。

しかし、彼は倒れている。

麒麟はそれを探すように、周りを見渡している。

見つかったら、お終いだ。

まだ完全ではない体を起こし、近くにあったハンドボールくらいの岩を掴んだ。

それを思いつきりぶん投げる。

見事に麒麟に命中し、標的をこちらに変えた。

次の突進を避ける策は、ある。

「ヒヒーン　　！！！」

突進してくると思っていたが、首を回し、俺に頭を向けるように振った。

「なっ　　！！！」

すかさず横に飛ぶ。

が、飛んできた雷を完全に避けることは出来なかった。

左肩から左手にかけて麻痺した。

それにこのままでは死ぬと予想される量の出血。

加え、麒麟はこちらに向かつて突進してきた。

さっきのように助けしてくれる人は絶対にいない。

来た。

当たる。

そう思ったとき、麒麟が消えた。

死の寸前、助かった理由も分からないまま安堵する。

「ジャスト10分デス　なかなか見応えのある戦いでシタ。ン？」

方的な攻撃は戦いつて言わないのでしようカネww」

安堵の思いが一気にぶち壊された。

逃げるのに必死で、忘れていた声。

むしろ忘れたかった声。

腹立たしい笑い声が闘技場に響き渡る。

「しかしながら、28人しか死んでませんネ……デハ続けて第2ラウンド行ってみましょうカ」

(ぐ……今来たら、確実に死ぬ)

とはいえ、何も出来ない。

ここ、闘技場にあるものは砂と岩だけ。

「その前に大サービスをしちゃいますヨ」  
また、初めの人を殺したときのように、中指と親指をこすり合わせてピンと弾いた。

「やめ」

「る、と言おうと口を開いたとき、異変に気づいた。

傷が治っていく……

「フフフwwさすがに惨い戦いを見る趣味はないですヨ」

あいつは何を考えている？

このまま傷を治さなければここにいるほとんどの人は死んで、すぐに神が決まると言うのに。

神の仕事が嫌になったんじゃないのか？

嫌になったんだったらすぐにも神をかわりたいはずだ。

どうして……

「デハ気を取り直しテ、第2ラウンドスタートッww」



## 鳳凰

さつきの怪物から予想して、きっと伝説の生き物だろう。しかも麒麟が出てきた、ということは四霊の中から出ると推測できる。

すなわち、俺達はあと30分間生死を彷徨わなければならないということになる。

また、開いて欲しくない扉が、開く。

開いた途端、その扉の向こうから飛び出し、中を舞う鳥。

ただの鳥ではない。

五色絢爛な色彩をもつ羽。

優に1メートルを超える背丈。

前は麟、後は鹿、頸は蛇、背は亀、額は燕、嘴は鶏の容姿。

予想通り。

これは 鳳凰!!

「ギャーーーーーオーー !!!」

「う……」

耳を劈くかと思うほど大きな鳴き声。

なおも空を飛び続けている鳳凰。

しかし、安心できることが1つあった。

鳳凰は平安を表すと言われている。

攻撃はしてこな

「ギャー！ー！！」

とてつもない鳴き声の大きさに耳を塞いでいると、地上にいた1人が嘴にくわえられ、空高く舞い上がった。

あんなところから落とされては一卷の終わりだ。

(伝記とか、伝説とかはすべて滅茶苦茶じゃないか！)

鳳凰のどこが平安を表してるのか。

空高く連れ去られた男は悲鳴を上げている。

しかし、どうしようもない。

信用のない伝説によると、鳳凰は梧桐の木にしか止まらないらしい。こんな干乾びた闘技場にそんなものあるはずもない。

見ていることしか出来ない自分。

と、突然鳳凰が嘴から男を放した。

落ちる

「ゴオオオオ      !!!!!」

(何    !?)

鳳凰の口から恐ろしい業火が噴出した。

闘技場は一瞬にして火の海となった。

しかも器用に、火を吐いたらすぐに落下途中の男を加えて上昇していく。

危険なのはあの男だけではない、と言うことだ。

あいかわらず非常識極まりないことに、この火は地面で燃えている。燃えるようなものは何もないが、メラメラと燃える炎は勢いを止めない。

空を見上げると、本性とは裏腹に美しい鳥が飛んでいる。

(あの男をどうにかしないと……)

とはいえ、何もいい手が思いつかな

「ギャア      !!!!!」

鳳凰が大きく翼を羽ばたかせると、絶対に常識ではあり得ない風が巻き起こり、竜巻が発生した。

(考える暇さえ与えてくれないのか!!!)

竜巻は徐々に大きさを増し、風力も増していく。

闘技場の中心に出来たそれは、周りにある岩をも削り取りとり、吸収する。

おまけに炎の勢いも強まる。

今、吹き飛ばされまいと必死にしがみ付いている岩も、あと少しで削られ、飲み込まれるだろう。

手がない。

(いや、ある)

それは原始的なことだが、今はこれしか方法がない。  
投石。

それしかない。

近くにあつた石を拾って投げるのだが、もう竜巻は目の前だった。  
どれだけ力いっぱい投げてても、石は竜巻の風に乗って回ってしまう。  
そのとき向こう20メートルほど先に目に入ったのが、さっき俺を  
助けてくれた男。

「おい　　！！石をあいつにぶつけてくれ　　！！！！」  
有らん限りの声を張り上げる。

鳳凰は空中で、俺達の死を待つかのように翼を羽ばたかせている。  
今なら当たると思う。

距離は何とか届くはずだ。

竜巻の風に押し戻されるが、それでも彼の肩力は負けていなかった。  
当たった！

「ギャー……オー……　　！！！！」

口からこちらに向けて噴出す火炎。

闘技場がさらに熱を帯びる。

(急激な温度の上昇で上昇気流が発生する)

上昇気流の上向きの風の力で、竜巻と相殺できないか……

神以外のものに祈っていると、竜巻が消えた。

普通、竜巻は上昇気流で消えるようなものではないと思うのだが……  
きつと神は試している。

どれだけの確に動き、判断し、今出来る最善の行動をするか。

そして、もっとも最善の行動を行ったとき、成功する。

そうやって神への試練をこなしたものが次の神となる。

ゴンッ

何かが、降ってきた。

落下したところが真っ赤に染まる。

これは、人　　！？

「っ……！！！」

案の定、鳳凰を見ると加えていた人はいなくなっていた。

さっきの火炎放射で怒りに我を忘れ、落としてしまったのだろう。

自分達が助かるために、人1人の命が犠牲となった……

こんなので、いいのだろうか？

誰かが助かるために誰かが死んで、いいのだろうか？

そうだ、そもそもこの神の選出はおかしい。

たとえ世界のためとはいえ、ここに集められた687人に、1人で

も死んでもいい人はいただろうか？

そんなもの、いない！！！！

「ギャオオオオオオ　！！！！！」

さっきよりも大きな鳴き声で骨が軋む。

頭が、くらくらする。

平衡感覚が狂って立ち上がることすらできない。

「アハ　もうみんな死にかけじゃないですかww」

神は、やはりどこか楽しげに言う。

「でも、もう覚醒しそうなコもいますネ」

なぜ、謙けんは死んだ？

なぜ、俺達は助かった？

なぜ、行く宛ての無かった俺達に与えてくれた道が、こんな悲惨な道でなければならぬ。

怒りを顕にし、涙を流し、呆然と立ちすくす男。

その男の拳は、煮えたぎるような紅をし、回りに陽炎を作り出している。

紅の色が濃く、熱くなり、  
そして、覚醒した。

(な、なんだ?)

鳳凰の鳴き声が止んだ。

尋常ではない暑さを感じ、熱気のする方へと目をうつす。

そこには周りで燃えている炎を黙らせるほどの、それ以上の何かがあった。

原因となっている男の手は燃え滾っている。

徐々にその拳に纏っている炎が全身を覆い、飛んだ。

「ギヤオ……」

見えなかった。

彼が飛んだ、と思えたのは土が跳ね上がったと同時に、彼が消えたから。

そして声のした方を見ると、彼の拳が鳳凰の腹に食い込んでいた。何が起こったかまったくわからない。

しかし彩斗達にとって有利になったのは確かだった。

「……ギャー……ギャー……オ……!!!」

腹に喰らった一撃を思わせない鳴き声とともに、体勢を整える。

しかし、先ほどのように耳を塞ぐ必要はないくらいの大ささだった。とはいえ、さつき飛んだ男は至近距離で聞いたため、音圧で吹き飛ばされた。

すかさず受け止めようと(どうせ無駄だろうが)、彼の落ちると思われるるところへ走りこむ。

が、行動も虚しく、空中で1回転し、空中で止まった。

理屈はまったく分からない。

空中での彼と鳳凰の戦いを見ることしかできない。

戦闘は、目で追うことが出来ず、出来ることといえば、時々見える

人の姿を人と認識することくらい。

必死に目を凝らしていると、片方が吹っ飛んだ。

吹っ飛んだのは……鳳凰。

そこにすかさず渾身の一撃を喰らわせる。

はずだった。

「そんなの喰らったら、ワタクシのペットが死んじゃうじゃありませんかww」

出てきた神が指一本で拳を受け止めていた。

「まア、あなた方の勝ちってことでいいデス　じゃあ次行ってみましょう」

あざ笑うかのように指をはじき、次のペットが出てきた。

## 霊亀

止められた男が吹き飛ばされるのとほぼ同時に、扉が開く。  
出てきた何かが何であるかは分からない。

2本足でしつかり立ち、手もついている。

しかし、四霊のうちの1匹であるなら、霊亀であると思う。

霊亀の資料はあまり無く、どんなものか想像がつかなかった。

甲殻類のように固い殻や甲羅を持つ甲虫であり、吉凶を予知するとされる。

今出てきた霊亀（？）は漢字の通り『亀』、ではなく、どちらかと言うとトカゲに亀の甲羅をくっつけた、と言った感じだった。

「ウフフwいいこと教えてあげましょウ」

出てきたものに気をとられ、神がまだすぐそばにいることを忘れていた。

「この男が『覚醒』したように、みんなこうなれるのですヨw」

（覚醒？）

聞きなれない言葉（と言うより、普通に使われる覚醒という意味を理解している彩斗にとっては）に疑問が湧く。

「まだレベル1ですケドねwともかく死にたくなければ頑張っテ

」

「キユルルルル」

神が言い終わるか、言い終わらないかのタイミングで奇妙な音がした。

その奇妙な音は、霊亀（か、どうかは分からないが、とりあえず霊亀）からした。

右手、右足をを後ろにするような、不格好な構えを取り、変な声、もしくは音を発している。

攻撃の溜めでもするかのように。

とはいえ、あいつはまだ、開いた扉から出ようとはしない。

(ここまでではさすがに攻撃は届かないだろう)

「キュルル……………」

音が、止まった。

ツシユ

目の前に、熱気を感じた。

その感覚に追いつくように、覚醒した男と霊亀が見えた。

どうやら彼が霊亀の攻撃を防いでくれたらしい。

俺に向けられたパンチを、灼熱の腕を交差させて止めている。

「おい、逃げる」

そういうと彼は腕をはじき、霊亀を吹っ飛ばした。

悔しいが、最善の行動としては逃げるのが一番。

今までの戦闘で、ほとんど無くなってしまった岩の影に入る。

そこには十数人の人がいた。

(隠れる場所も少ないし、当たり前か)

あまり深く考えず、出来るだけ離れた場所に腰を下ろした。

後ろからは戦闘の音が絶えず聞こえる。

(こんなとき、何も出来ないなんて…………)

悔しさが込み上げ、冷静を取り戻す。

(今は仕方ないんだ)

「お前、無事だったのか？」

突然話しかけてきたのは、麒麟との戦闘で助けてくれた男だった。

「俺、啓作<sup>けいさく</sup>」

「彩斗」

簡潔に名前だけ言って、そっぽを向く。

ここへ来て、もっとも恐れていたことが始まりそうだった。

「なあ、覚醒って何だと思う？」

冷たくあしらった俺を気にすることなく、皆が気になっていることを聞いてきた。

「何かを原因に、ああやってなることだろ」

戦っている最中の男を指差す。



しかし依然として態度は変えない。

「やつ……う……」

彼は急に立ち上がるうとしてうずくまった。

どうしたのかと思ひ、全身を見渡すと、足が血だらけだった。

彼だけではない。

その向こうにいる男女共々、命にかかわると言つた傷ではないが、軽傷を負っている。

（さっき、神は俺達を回復させなかったのか）

自分のことは気に留めるのに、他人のことは気にもしていなかった。

「俺も覚醒、しねえかな……」

男はボソッと呟き、岩陰から飛び出した。

「っ……、何考えてんだよ!」

一緒になつて俺も飛び出す。

何か考えがあるわけでも、霊亀に対抗する術があるわけでもない。

ただ、あいつを連れ戻さないと、という感情で動いていた。

「だあ!」

闘技場のど真ん中で戦っている。

目で追うことのできないスピードでパンチやらキックを繰り返して  
いる。

そこに向かつて、何も考えずに飛び込もうとしている啓作がいた。

「戻れ　!!!」

そう叫んだときには、すでに霊亀をぶん殴っていた。

「危ないぞ」

「百も承知だ」

2人は息を合わせ、戦おうとしている。

（俺は、何をしているんだ）

足の振るえが止まらない。

やっぱり、怖い。

その感情を振り払うことが出来ずに、立ち尽くしていた。

## 覚醒

『覚醒、しねえかな』

啓作の言葉が自分に跳ね返った。

自分自身、その言葉を願っていた。

覚醒、しねえかな。

覚醒、しろ。

俺も、覚醒、しろ。

覚醒したい、覚醒、覚醒、覚醒。

頭の中を何度も回る覚醒と言う言葉。

血がにじむほど、拳を強く握り締め、それに負けないほど、強い思いをめぐらす。

生きるためじゃない。

自分の居場所を作るためじゃない。

あいつらを助けたいのじゃない。

みんなを守りたいんだ。

神をぶっ飛ばして、元の世界へ戻りたいんだ。

覚醒、しろ　！！！！

その想いを打ち砕くかのように、何も起こらなかった。

(なんて非力なんだ……俺は)

気持ちが足りない。

違う。

頭で理解してなるものではない。

体が反応するんだ。

自然と。

「おい、戻れ！！」

覚醒した男が叫んだ。

その言葉に我を取り戻し、もといた場所へ走る。

結局、啓作は戦いに加わった。

勝ち目のない戦いだと分かっている、自分が役に立てないと分かっている。

「が……はっ……」

俺が岩陰へ入ろうと思ったとき、嫌な声が聞こえた。

それは啓作のものだと、自分で勝手に決めつけて、また、戦いの最中に飛び込もうとする。

（啓作を連れ戻さないよ）

そう、思っていた。

しかし予想を反した光景が、そこにはあった。

倒れているのは、覚醒した男のほう。

ともかく、彼の元へと走る。

「力は使えば減るものデス」

神の言葉にいちいちかまっている暇などない。

彼は限界を知らずに力を使いすぎた、ということくらい、倒れたときから彩斗は察していた。

「大丈夫か!？」

戦闘の真っ只中で、倒れたやつをたたき起こす。

「わ……るい……」

かろうじて息はしている。

腹に大きなアザがあるから、攻撃を防ぐ時にちょうど力が切れたのだろう。

（ここから移動しなければ……）

「啓作！そいつ頼めるか!？」

「無理だ!」

だろうな。

覚醒したやつが負けてるんだ、生身の人間が戦えるはずない。

うだうだとした考えをすべて取っ払い、倒れた男を抱え、岩まで走る。

相変わらず霊亀の攻撃は続く。

何発かかすったが、致命傷ではない。

「ぐわっ……」

あと数歩でたどり着く、と言ったところで、今度は啓作が嫌な声を出した。

パンチを受け、それこそまさに漫画のように吹っ飛び、闘技場の壁を破壊した。

人間なら確実に死んだ。

しかし、啓作は人間だが、驚異的な生命力で死んでいなかった。動いている。

ただ、今追い討ちをかけられたら、まず生きていられないだろう。抱えた男を下ろし、啓作のもとへと駆け寄ろうとしたとき、

「や、……めとけ」

とめられた。

「なんで？」

「死ぬぞ……」

「瀕死状態のやつに心配されたくねーよ。俺しか無傷なやついないし仕方ないだろ」

そういつて走ろうとしたとき、また止められた。

「名前、は？」

「彩斗」

「そうか……悠二、だ……」

（早く啓作のもとへ……）

その気持ち先走り、悠二との会話を途中で切り上げた。

啓作は壁を背に、立ち上がることが出来ずにいる。

やっと、彼の元に着いたとき、忘れていた音が響いた。

「キュルルル」

近くに霊亀がいることを忘れていたわけじゃない。

ただ、現実逃避したかっただけだ。

「情けない……」

「いいから、喋るな」

今、啓作を背負ったところで、不意を疲れて2人ともお陀仏だろう。

それは1番よくない。

(かといって俺だけ逃げるわけにはいかないよな)  
立ち上がり、啓作の前に。

こちらをずっと見て、攻撃の構えをしているあいつをにらむ。  
守りたい。啓作を。

誰にも死んで欲しくない。

もし、自分が死んでも

消えた。

ガシャンッ

霊亀の動きが見えた。

右からの攻撃、そう分かった。

しかし、それ以上のことが起こった。

腕でガードしたはずだったのだが、いつの間にか手にはトンファー  
が握られていた。

「オメデトーございマス」

(俺は、覚醒したようだ)

神の言葉で、そう確信する。

「キュルル」

まだ霊亀は攻撃をやめようとしなない。

いや、きつと消えるまでしないだろう。

左前方から右後ろへ即座の動き、蹴り上げ

「キュウ……」

「見える」

相手の動くタイミングに攻撃を合わせれば、当てることも出来る。

「お前、……覚……」

「ああ、多分」

啓作が言い終わらないうちに、3回目の攻撃。

次はこちらからの攻め。

俺の勢いを殺さないようにして、俺の腹へもぐり、パンチを繰り出す。

そのカウンターを左のトンファーで叩き落とし、すぐさま右のトンファーで顔面を殴る。

「勝てる」

はるか前方へ吹き飛んだ、吹っ飛ばした霊亀を見て、少なからず希望が湧いた。

そのとき、霊亀がすう、と消えてしまった。

「10分経過ですww頭のいいコなら次何来るか分かりマズネ　フイナールを飾ってくれるのはこのコ！！頑張っテ」

頑張れなどと微塵も思っていない神は、何の抵抗もなく、指をはじいた。

彩斗は勝てる、と思った希望を打ち砕くように現れた神が憎かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1665e/>

---

Delete

2010年10月13日15時03分発行